



## ■ 目 次 ■

1. 水口岡山城の位置	1
2. 水口岡山城の歴史	2
3. 水口岡山城に登ろう	
●大手の枡形と大手道	4
●城の枡形虎口	5
●食い違い虎口	5
●本丸と天守台	8
●堀切	9
●伝二の丸	9
●伝三の丸	10
●伝西の丸	10
●出丸（仮称）	10
●竪堀	11
●大石垣	11
●城下町と水口宿を歩く	14
●水口城と水口宿	19
●藤栄神社	20
●美濃部氏と美濃部屋敷	21

本埋蔵文化財活用ブックレットは、滋賀県教育委員会が国庫補助金（史跡等及び埋蔵文化財公開活用事業費）を受け、甲賀市教育委員会の協力のもと原稿を作成し刊行した。

表紙写真：水口岡山城跡出土瓦

## ■ 1. 水口岡山城の位置 ■

水口岡山城は水口市街地の北側に位置する古城山（標高282m）という独立丘陵上に築かれた平山城です。現在は、城山とよばれ市民に親しまれています。城は鈴鹿峠から蒲生一帯と眼下をとおる街道を一望でき、軍事・交通の要衝地として甲賀郡の要の城として築られました。築城は名手の中村一氏が当たっており、丘陵頂上部に設けられた縦に並ぶ曲輪は石垣で普請され、本丸には天守、随所に櫓台を設け、曲輪を堀切で区切り、斜面に竪堀を設けた姿は、織豊政権の築城の姿をよく現しています。曲輪内からは瓦も発見されており、瓦葺きの建物群が建ち並ぶ姿は、さぞかし目を見張るものだったことでしょう。織豊政権下の築城の特徴としては、初めて琵琶湖沿岸部以外の内陸部で築城された城であり、政権下での重要性がうかがえます。



水口岡山城位置図

## ■ 2. 水口岡山城の歴史 ■

中世から戦国期にかけて、甲賀の地を支配し続けたのは、古くから甲賀の地に住む武士。後に、「甲賀衆」、「甲賀武士」として呼ばれる在地領主（国人・土豪）たちでした。彼らは、村々に城を築き自らの力で自らの領域を守りました。地域のことは地域で守ろうと。そのため自治連合組織を作って活動をしたのです。それが、「同名中」や「郡中惣」とよばれる甲賀独特の組織でした。織田信長が近江に侵攻してきた永禄 11 年（1568）ころは、甲賀衆は和田氏を中心に、信長方に味方していました。しかし、元亀年間に入ると、近江の中では延暦寺や六角氏を中心とした反織田勢力が勢力を巻き返しました。甲賀衆のおおくも六角氏の被官として、この戦いに参加したようです。天正 10 年（1582）、本能寺の変で織田信長が明智光秀に討たれると羽柴秀吉が政権を



水口岡山城の遠景



水口岡山城跡出土瓦

引き継ぎました。その結果、天正 13 年（1585）に安土城を廃し近江八幡山城を築き羽柴秀次を城主とし、織田方の坂本城、長浜城、大溝城を引き継ぐとともに、新たに東海道と内陸部の押さえとして、甲賀衆を改易させ、水口岡山城に新城を築き中村一氏を城主としました。その後も天正 18 年（1590）に増田長盛、文禄 4 年（1595）に長束正家と豊臣政権を支えた重臣達が城主を務めました。しかし、慶長 5 年（1600）、五奉行のひとりである長束正家は豊臣家を擁護し、徳川家康を弾劾。関ヶ原の戦いでは毛利秀元・吉川広家とともに南宮山に布陣しましたが、本戦には参加できないままに敗走しました。そして水口岡山城に逃げ包囲されたあと、日野佐久良谷で自刃したと伝わります。水口岡山城はそのまま一旦は池田長吉の預かりとなりましたが戦後処理として廃城となりました。

### ■ 3. 水口岡山城に登ろう ■

#### ● 大手の枡形と大手道

城下から城の正面玄関へと向う道が「大手道」です。その最初の入り口が大手の枡形です。もともとは、城の手勢を追って行くことから「追手」と書きました。その逆が手勢を搦め捕ることから



現在の大手道

「搦手」と呼ばれます。水口岡山城の大手筋は、現在の大岡寺の前の直線道路にあたります。大手道はそのまま現在の大岡寺の境内地を通り、城麓に付けられた県道によって分断されていますが、さらにそのまま山の斜面を登り、稲荷神社のある曲輪にて、さらにそこから城本体の枡形虎口へ続いていました。道は細くジクザクで急勾配であり、夏



現在の大手口

ともなれば、草木が生い繁りととても登りにくいですが、築城当時は、幅も広く確保された山城の大手道にふさわしい登城道であったと考えられます。

#### ● 城の枡形虎口

城の玄関口には、虎口（虎の口に似ているところから城の入り口施設をこう呼びます。）が作られています。ここでは織豊系城郭の城づくりの要である枡形虎口が用いられています。枡形虎口は、土塁や櫓、門で構成される



城の枡形虎口

防御施設のことで、土塁で遮蔽するその形が、枡の形（四角）に見えることからその名がついています。敵が一度に通れなくし、敵を迎え撃ち易いように作られています。

#### ● 食い違い虎口

大手の虎口を入ると直ぐに、帯曲輪（帯のように細い曲輪）に至りますが、門内右脇に、通路を遮蔽するように、食い違い



食い違い虎口

い虎口が作られています。このことで、門をくぐった兵はこのうちに潜む城兵から、不意打ちを食らうこととなります。また、袖石垣を交互に食い違わせることにより、敵の侵入を阻む目的があります。

■ 水口岡山城跡概要図 ■



## ● 本丸と天守台

城山頂の西半分を占める細長い「へ」の字形をした曲輪が本丸と考えられています。本丸は他の曲輪よりも一段高いところにあります。曲輪の内部は未発掘なので建物施設の構造はわかりません。本丸からの麓への監視と、本丸自身を守るために東の端と西の端に櫓台が付けられています。絵図等では、東の端の櫓台が天守台と考えられていますが、位置的に西端の櫓台が天守台であるという見方も



天守台か？櫓台か？

あります。東端の位置の場合、城の中央部で大手門内直ぐの位置に当たります。西端の場合は伊勢側から見た場合の最も奥の位置に当たり、城下町の大手筋の正面に当たることから、西端の位置の方がしっかりと来るような感じもあります。これから行われる発掘が楽しみです。いずれにしても、天守台は石垣もなく、規模もさほど大きくありません。



本丸跡

## ● 堀切

山頂の曲輪群は、東西に一直線に配置されています。この山頂の曲輪と曲輪を独立させ、曲輪間の行き来を出来無くさせる仕組みが、「堀切」です。堀の形には、「箱堀」（はこぼり）、「薬研堀」（やげんぼり）などがありますがいずれも水はなく「空堀」（からぼり）です。現在は埋まっていますが、実際は堀の角度は急で、一度落ちたら滑って容易には登ることが出来ません。正面から見ると堀切で3つの曲輪が区切られているように見えますが、実は曲輪どうしは、後ろ側で「土橋」で繋がっていて、曲輪の裏口どうしで行き来が出来るようになっています。



堀切

## ● 伝二の丸

堀切を挟んだ本丸の西側に、二の丸と伝えられている曲輪があります。曲輪は長方形をしており、礎石も一部認められることから、御殿のような建物が建っていたと考えられます。曲輪への入り口は南側の帯曲輪から階段を上り門をくぐる平入りで入ります。門位置の両脇に櫓台が付けられていることから櫓門の可能性もあります。また、裏には枡形虎口が造られています。



伝二の丸

## ● 伝三の丸

堀切を挟んだ伝二の丸の東側の曲輪が、三の丸と伝えられている曲輪です。三の丸は、正面の南西隅と中央、背後の中央の三個所に虎口が設けられています。背後の虎口は枡形虎口です。曲輪はほぼ本丸と同じくらいの規模です。曲輪の東端に立つと、鈴鹿山系が一望でき、敵の動きを監視するにはもってこいの場所だということがわかります。



伝三の丸

## ● 伝西の丸

城の西端には、西の丸と伝えられている曲輪が造られています。西の丸と本丸の間は、頂きから山裾まで長く「豎堀」(たてぼり)が築かれており、防御性を高めた独立させた施設として曲輪が造られていることがわかります。



伝西の丸

## ● 出丸（仮称）

城の最東端には、三の丸から一段下がった位置に出丸が築かれています。出丸は外方に半円形をしており、さらに外に向かって放射状に遠望がきくようになっているようです。戦闘の時は、多くの兵がここに集結するのかも知れません。



出丸（仮称）

## ● 豎堀

城には本丸と西の丸の間の豎堀だけではなく、北側斜面や南側斜面、西端の斜面などにも造られており、山の斜面伝いに容易に山頂部の曲輪群に近づけないような構造になっています。



豎堀

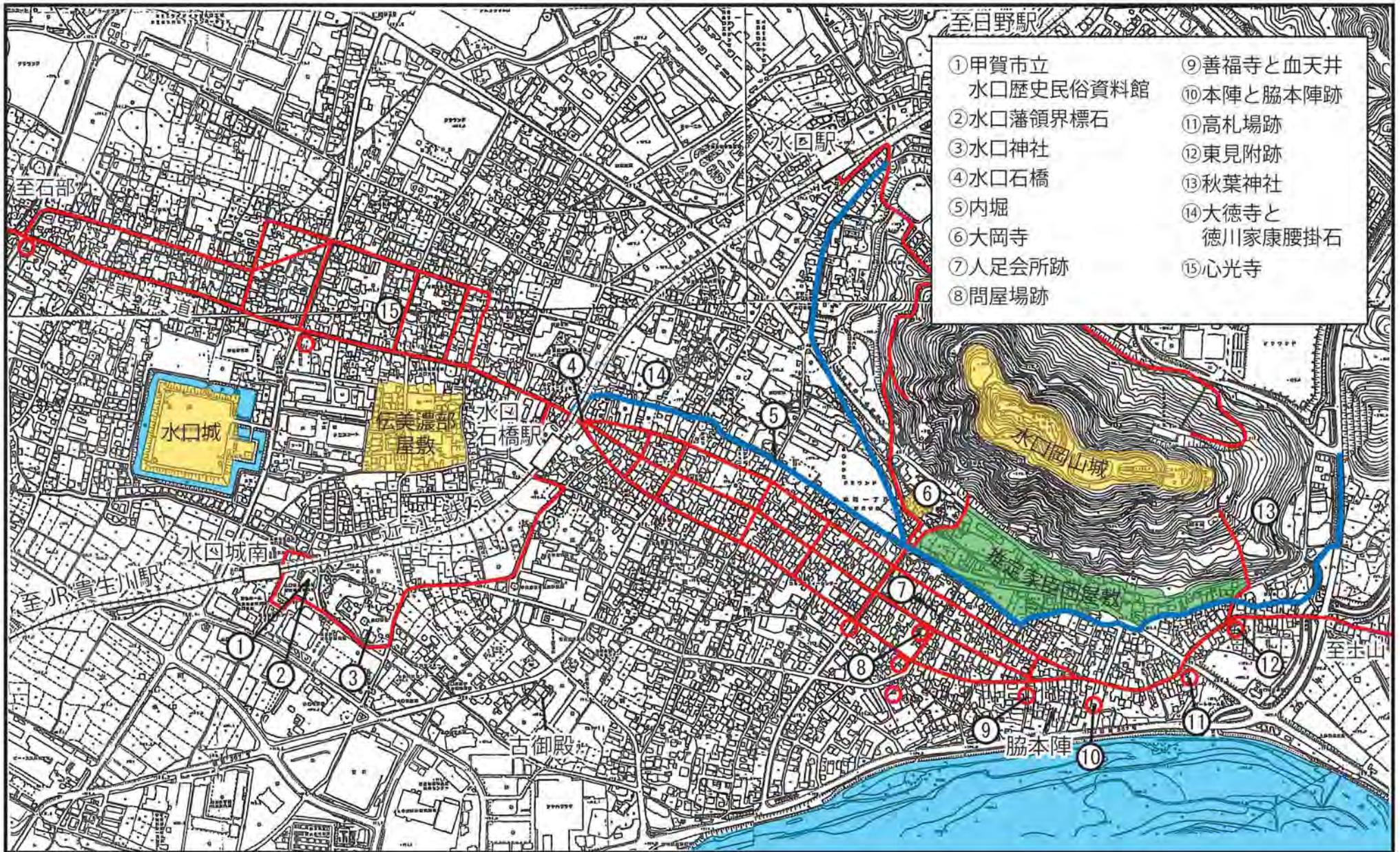
## ● 大石垣

廃城後に破城をうけているため、現在は注意深く曲輪の周辺を観察しないと見落としますが、城は織豊系城郭らしく石垣づくりで普請（土木工事のこと）されています。唯一、高石垣を見ることが出来るのは、本丸を支えるために造られた本丸の背後の切岸（人工的に作られた曲輪の斜面）です。この石垣が城内では最大のものであります。



大石垣

■ 今の水口岡山城下と水口宿を歩く ■



## ● 城下町と水口宿を歩く

### ①甲賀市立水口歴史民俗資料館

「第1展示室」は毎年4月に活躍する曳山を展示。「第2展示室」は江戸時代を中心に歴史・考古資料が展示されています。「第3展示室」は民俗資料を展示をしています。



水口歴史民俗資料館

### ②水口藩領界標石

資料館の入口に高い石碑が建てられています。前面に「従是東水口領」と彫られており、江戸時代の藩の領地の境に建てられた領界標石であることがわかります。もとは水口町泉の横田渡し南対岸にあったものをここに移築したものです。



水口藩領界標石碑

### ③水口神社

平安時代の延喜式に記録されている式内社のひとつです。「水口」という名のおおりに、一帯の開発にかかわって祀られた神社。江戸期には水口藩主加藤氏の庇護を請けました。例大祭は、毎年4月に行われる「水口曳山祭」です。特に曳山巡行は、享保年間（1716～35）に町の繁栄を願って始められ、いまも町民の力で守り継がれています。



水口神社

### ④水口石橋

「水口石橋駅」を降りて、右折すると直線道路と交差します。その道路が東海道です。馬渡川（堀）に架かる東側が豊臣期の城下町です。石橋の位置で、城下の三本の道が、橋に向かってひとつになっています。



水口石橋

### ⑤内堀

石橋の下を横切る馬渡川が、水口城の下を横切る内堀の痕跡です。現在、堀は民家の裏の水路や道路側溝という形に姿を変え、幅も狭いものとなっています。水口小学校正門内には、ヴォーリズが建築した旧水口図書館（国登録有形文化財建造物）も見ることができます。



内堀

### ⑥大岡寺

行基が開基したと伝えられ、「岡観音」と呼ばれ、一時は諸堂が山を埋めるほどの勢いを誇っていましたが、度々の戦火で天正2年（1574）には東の坊を残すだけとなっていたようです。城を築くにあたり、坊は麓に移転。現在の位置に再建されました。



大岡寺

## ⑦人足会所跡

宿場間での荷物の運搬を行っていたのが、「人足」です。その人達の詰所で問屋場が差配していた場所が「人足会所」です。さながら、宿場町を行き交う旅人を支え、荷物を送り届けた、現代版ポーターといったところでしょうか。



人足会所跡

## ⑧問屋場跡

現在は民家が建ち並んでいますが、最盛期の宿場は人と物の往来で賑わっていました。問屋場は、宿駅の業務である人馬の乗り継ぎを管理した場所で、公的人馬や荷物を中心に次の宿まで運ぶ伝馬と、人足で成り立っていました。水口宿では、江戸中期以来この場所で有力者が役人として運営にあたっていました。



問屋場跡

## ⑨善福寺と血天井

本堂は、水口岡山城が落城したのち天守の焼残り材を使って造ったと伝わっています。事前にご住職に問いあわせると、本堂の天井に残された、切腹した武将の血手形を見せていただけるそうです。



善福寺

## ⑩本陣と脇本陣跡

本陣とは、江戸時代の宿場で大名や旗本、幕府役人や公家などが宿泊所として利用した施設です。脇本陣は、本陣に準じる施設でした。水口宿の本陣と脇本陣で本陣の建物は残されており、その跡地だけが残されており、現地には明治天皇行在所の石碑が建っています。



本陣跡

## ⑪高札場跡

幕府や領主が発布する基本的な法令を、領民を始め往来する旅人にも知らせるために、それを記した木の札を掲示した場所です。江戸時代には全国の主要な街道の辻に設置されていました。



高札場跡

## ⑫東見附跡

東海道水口の宿の東の端の入り口にあたります。江戸に向かう場所であることから「江戸口」と呼ばれています。ちなみに、五十鈴神社の南側にある西の入口は、西見附「京口」と呼ばれています。宿場町の整備に伴い入り口の警備は厳重となり、枡形に土居が巡らされ木戸や番所がおかれしました。



東見附跡

### ⑬秋葉神社

「火事と喧嘩は江戸の花」のとおり、江戸では頻繁に火災が発生した。これは、江戸が大都会で人口密度が高く、家が密集しており、それだけ火を使うことが多かったからです。

このことは、全国の城下町都市でも同じでした。水口宿でも江戸時代3度の大火に見舞われました。そのため町人が明和7年（1770）に遠州秋葉大権現を分祀し神社を築きました。



秋葉神社

### ⑭大徳寺と徳川家康腰掛石

初代城主中村一氏が元禅宗であった林慶寺を、香花院と定め小田原の大蓮寺の僧叡誉に寺の建立を依頼し、後に浄土宗浄慶寺と改めました。また、関ヶ原後は家康の「家」、松平の「松」をとり「家松山」と号し、慶長7年（1602）に大徳寺と名を改めました。門脇には、家康が住職の法話を聞くために座ったという「家康腰掛石」があります。



大徳寺

### ⑮心光寺

菅原道真が延喜元年（901）に失脚し、太宰府に左遷されたとき、五男淳茂も京を追われ菅原氏の荘園であった水口にいた美濃部氏を頼りこの地に居を構えました。淳茂が、この地で父の菩提を弔うために建てたのが、この心光寺といわれています。墓地には、江戸時代に旗本となった美濃部氏一族の大きな五輪塔や墓石が立ち並んでいます。



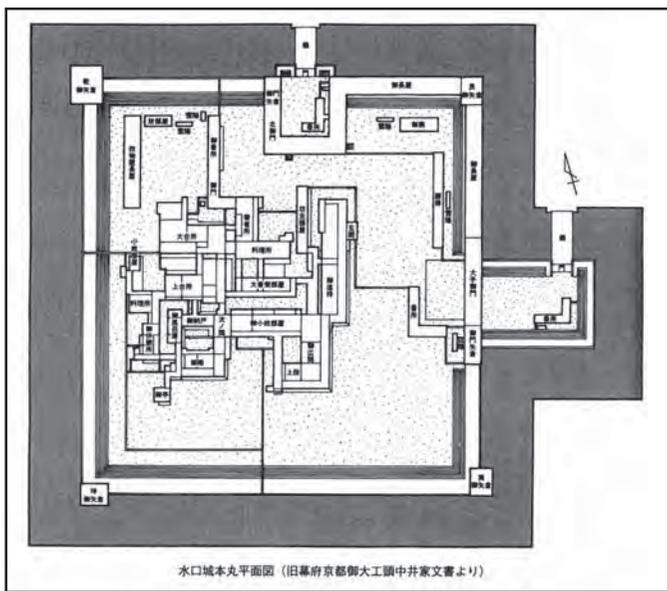
心光寺

## ● 水口城と水口宿

関ヶ原合戦後、水口は幕府の直轄領となりました。豊臣期の城下町は東海道の宿場町として歩み始めました。家康は京への道すがら度々、ここに宿泊していたようですが、三代家光は寛永11年（1634）の上洛に当たって宿所として水口城（水口御茶屋御殿）を築かせました。御殿は寛永3年に築城された二条城を模し、平地で四方を水堀で囲った敷地の隅に櫓を建て、その内に御殿を建てたものでした。天守はありません。しかし、家光はこの時一度切りしか使用せず、天和2年（1682）からは加藤明友が2万石で城主となり水口藩が成立しました。3代の城主は、鳥居氏が務めました。4代以降はまた加藤氏が城主となり明治までを過ごしました。ただし城は幕府のもので、藩は二の丸に政庁を置いて使い、本丸御殿は使用しませんでした。



水口城跡（滋賀県指定史跡）



水口城本丸平面図 (旧幕府京都御大工頭中井家文書より)

水口城本丸平面図

## ● 藤栄神社

藤栄神社は、初代の水口城主加藤明友の祖父加藤嘉明を祀る神社です。神社の入口、鳥居の脇には「藤栄神社」の石柱がありますが、裏面にまわると「従此川中西水口領」と書かれています。もとは、水口藩の領界標石で今郷の稲川の土橋のたもとにあったものを明治維新直後にこの神社に持ってこられたものです。また、加藤家奉納井戸枠も見ることができます。



加藤家奉納井戸枠



藤栄神社石碑

## ● 美濃部氏と美濃部屋敷

水口の地が中村一氏の領地となる以前、この辺り一帯は、甲賀武士であった美濃部氏が屋敷を構えて住んでいました。天満宮に伝わる話によると美濃部氏は、菅原の道真が左遷された時に五男の淳茂が美濃部郷の平為親宅に身を寄せて、そこで生まれた子の直茂が在地領主として居宅を構えたことに始まるといわれています。現在、美濃部氏の城館遺構はほとんど残っていませんが、かつては四方を囲う土塁が現存していたようです。城館の位置は、県立水口高校の西隣、美濃部町の一角、字「八光」あたりの半丁四方形の範囲と考えられています。かつては、南端には井戸跡や「木戸口」の地名も伝わっていたようです。



現在の美濃部町あたり



美濃部氏の菩提である心光寺